



### 最高の見つけもの

ベンの両親が毎年海へ行った。南へ行ったり、北へ行ったり、時には船で、時には飛行機で行きましたが、いつも海に行った。ベンは気晴らしに一度は火山を見に行くか、エレベーターで高いビルの100階へ行ってみたかった。エスキモー、北極熊や本物のジャングルどころか、インディアナも見たことがなかった。

また今度ね」とお父さんは言った。しかし、次の夏休みにもまた海に行った。

まあ、いいや。じゃ、海の研究者になろう」とベンは思った。そして、ベンはこの海に行っても、マーメイドの瓶いっぱいの砂、クッキー缶いっぱいの貝殻、ヤドカリの家といっぱいの見つけものを持って帰った。両親は叱りましたが、ベンが石と海綿を靴につめると引きずって行った。

ベンの部屋の棚はちゃんとラベルが貼られたガラスいっぱいの砂、お皿いっぱいの貝殻と箱いっぱいのヤドカリの家で詰まってきた。

石が水が入った大きな瓶に入れた。というのは、濡れているほうがきれいに見えるからだ。とても特別な見つけものは宝箱みたいに塗った靴箱に閉まっておいした。その中に、カニのはさみ、ウニ殻のひとかけら、石になったヤドカリの家とよく分からない写真が入っていた。ちゃんと見たら、たくさんの小さなヤドカリの家が蒼い水の中で岩にくっついてるのが分かった

ベンが宝を見せた人は皆この写真何と聞いた。

そして、「これは思い出なんだ」とベンは答えた。

今まで見つけた物の中でこれが一番だよ」。





これはサルディニアの浜辺で見つけた。そこは他に誰も行かないほど岩の多い所だった。

巨大な岩が巨人がばら撒いたように粗い砂の中にあった。海の至るところからも石が突き出ていた。ベンが一つの石からもう一つの石へ飛び移った時に、岩の水面からすぐ下のと

ドカリの家を突然見つけた。最初にどれをつかめばいいかわからないほどたくさんあった。

ベンは急いでマメレードの瓶を開けて、ヤドカリの家を一ずつ岩から取って、瓶がほとんどいっぱいになるまで詰めた。そして、太陽で温められた大きな岩にのぼって、宝物を見た。

驚いてもうちよつとで瓶を落としそうになった。その中ではヤドカリがいっぱい這い回っていた。小さな黒い足がじたばたして、せわしなく出口を探して、つるつるしたガラスをのぼって出ようとしていた。

初めは手を入れる勇気がなかったけど、近くから見ると群れからヤドカリの家の一つ取り出した。その家にはとてもちっちゃいヤドカリが入っていた。黒い足がベンの指にしがみつこうとするみたいにひっかいた。すばやくベンはヤドカリを瓶に投げ入れた。





写真で充分だ。  
感じた。

ありありと。

ただ見るだけで、ちっちゃくて黒い足が指をひつかいているのを

そして、ヤドカリが興奮して這い回り続けている間、海のほうへ目を向けて長い間考えていた。ようやくベンは溜息をついて、ヤドカリを見つけたところへ降りてもどった。注意してヤドカリを海にふつてもどした。全部。

「二匹も持って帰らなかったの」と親友が写真を見た時に聞いた。 「二匹も？」

うん、いつも死んで、干からびた足を見る気にならない」とベンは答えた。